

「もとはこちら」のお話し

No47 今月のテーマ

地蔵の辻



もとはこちらの碑

身に覚えのない事は
身の覚えのあることよりも
根が深い

(平井謙次作 日めくりカレンダーより)

旧暦の七月二十二日頃から地蔵盆が始まりますが、国道二十四号線沿いに「地蔵の辻」といわれる所があります。車の行き交う交差点の道際には小さな祠(ほくら)があり、いつもきれいにお花が飾られていました。

何年か前、区画整理のためにこの祠は少し南に移され、新しいものに造り変えられました。今もお参りの人は絶えないようです。近くを流れる紀ノ川の河川敷もきれいに整備され、休みの日には犬を連れた家族連れや若いカップルなどが、ゆったりと流れる川のはとりで楽しいひと時を過ごしております。

今はこんなのかな所ですが、江戸時代には縄で縛られた囚人がここまで引つ張つてこられ、このお地蔵様の前で最後のお祈りを捧げ、そのすぐ後で、近くの河原で処刑をされたという、ここはそういういわくつきの場所だったそうです。

処刑された人の中には、勿論実際に罪を犯した人もいた事でしょうが、「冤罪(えんざい)」によって無実の罪を着せられ、無念の中で処刑されていった人も沢山いたのではないかと思います。これらの罪無き人々は死の直前、このお地蔵様の前で何を思い、何をお祈りしたのでしょうか。

冤罪とは、全く身に覚えが無いのにある日突然捕らえられ、拘束されて自由を奪われてしまうという、絶対にあつてはならない、この世の悲劇のひとつです。どれほど「自分はやっていない」と必死に訴えても聞き入れられず、犯人扱いされて罪を償わされ、場合によっては処刑されてしまう事さえあります。

北原ゆり筆

こういう冤罪による犠牲者は江戸時代だけでなく、いつの時代も相当あったはずで。私達はこのような悲劇を繰り返さないためにも、医学界も科学界もそして司法界もこぞって問題を洗い出し、原因を徹底的に究明し、改善して行かねばなりません。

今は DNA 鑑定の精度も格段に上がり、これからは冤罪も少なくなっていくだろうと思いますが、しかし世界的にみれば、まだまだこの手の悲劇はなくなるのではないかと思います。

永遠無限の命



しかしこの冤罪問題を考えるとき、何よりも先ず一番に私達が知っておかなければならない事は、「自分とは、始めも知らぬ昔から、永遠無限の未来まで、ずっと生き続けている、肉体の生死を越えた存在である」という事です。そして自分のした事が、作用と反作用の法則により、いつかは必ず「した事と同質同量の事をされる」という自然の摂理のもとで、私達は生かされているという事です。

この法則は、「生まれて来たものは、必ず死ぬ」という事と全く同じくらい、疑いようの無い絶対の自然の法則です。

ただ、生死そのものは、人間の平均寿命という点などから、自分が死ぬおおよその時期というのは大体の見当がつきます。

しかし、「自分がした事と同質同量の事を、人からされる」という、作用に対する反作用がいつ起きてくるかという事については、私達人間程度のものにはなかなか分らない様になっています。

しかしそれも、肉体の生死を越えて生き続けている永遠無限の命というマクロ的な世界、神の世界から見れば、すべては自然の摂理の必然として一番良い時期・良い状況の中で、私達の身の上にそれは起こってくるのです。

因果応報



例えば罪を犯しながらも、最後まで捕まらずにすんだ人も沢山いるはずです。この人はうまく逃げおおせたと喜んでいてもいいかもしれません。

しかし自分の代わりに誰かが捕まり、その人に自分の罪の償いをさせていたかもしれない。もしもそうであれば、いつの日か必ず、今度は自分が人の代わりに捕まり、人の罪を償うことになるのです。

それが今生で起きるか来世で起きるかは知りませんが、捕まったその時、「身に覚えが無い、絶対に自分はやっていない」といくら言っても、なかなか聞き入れてはもらえない筈です。

いずれは冤罪が晴れて釈放されるかもしれませんが、それまでの長い間、無実の罪のために耐え難い苦痛の日々を送る事になるのです。しかしマクロ的に見れば、その苦痛の中で、結局は他人の為の罪滅ぼしでなく、自分自身の過去の罪滅ぼしをしたという事になるのです。

平たく言えば、借りを返したというだけの事です。

しかし、この自然の摂理を知らなければ、自分は許しがたい不当な扱いを受けたと、いきてお憤る事になります。そして自分の不幸や運の悪さを誰かの或いは何かのせいにして、謝

罪や補償を要求する様なことになるのです。

しかしこの、体験した事を誰かのせいにして相手を恨み憎み、場合によっては仕返しを考え、或いは謝ってもらわなければ気がすまないという様な思いで生きること自体が、この世の不幸であり、実は将来的にも更なる不幸を呼び込む事になるのです。

私達は誰でも冤罪で捕まる可能性があります。それは、永遠無限に生き続けている自分という観点から見れば、今までに何一つ間違いを犯さなかった人などというものは、ただの一人としていないからです。表ざたにならなかった、即ちまだ償いの済んでいない罪を、私達は持ち越してきているかもしれません。現に今も私達は、毎日のように小さな罪を犯し続けております。そして罪を犯しながら、その事に気さえ付かないでいる人が殆どです。人間とはそういう存在です。

罪滅ぼし

ところで犯した罪の償い方にも色々あります。

一つは冤罪で捕まって、無理やり罪の償いをさせられるというやり方です。しかし現実のこの世界では決して冤罪は認めてはならないし、当然そういう形で人の見えない過去を裁く事も許されません。

ですからそうではなく、より好ましい方法は、「自分には自分でも気付かぬ罪が沢山ある筈だ」という前提に立つやり方です。そして自ら進んで積極的に良い事を実行する中で、過去のマイナスを消す、即ち罪滅ぼしをしていくというやり方です。こちらの方は、最初にあげた方法と違っ

て、将来がどんどん明るくなり、自分も他人も幸せになつて行ける明るい罪の消し方であり、正しい生き方です。

ところで「君子危うきに近寄らず」という言葉があります。裏を返せば、冤罪で捕まるという縁も、実は自分が自分で引き寄せているという事です。内なる悪因が膨らんで大きくなれば、無意識の自分がそういう縁を呼んできて、汚れたものを外に吐き出し、自分で自分を清めようとするのです。

神の子人間

それは人間とは元々とてもきれいな存在であり、清らかな神の子であるからです。体験する事すべては、自分の汚れを取り除き、より幸せになるための魂の浄化作用です。

人間は間違いを犯す動物です。しかし自然の摂理である神様は絶対に間違いを犯す事はありません。

「生死一如、因果一如」が神、即ち自然の摂理の基本であり、私達の人生の基本でもあります。

この世的には理不尽と見えるこの冤罪を初めとして、多くの悲しみを見つめてきた地蔵の辻のお地蔵様も、私達人ひとりを慈愛の眼差しで見つめながら、「善因善果、悪因悪果」と、優しく諭されている様な気が致します。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也
専用HP <http://www.motoha-kochira.com>
mail: data3@motoha-kochira.com

